

氏 名	金子 未弥 (カネ ミヤ)	
学 位 の 種 類	博士 (芸術)	
学 位 記 番 号	甲第 66 号	
学 位 授 与 日	平成 29 年 3 月 23 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
論 文 題 目	都市の肖像を求めて —地図の解体と都市像の再構築—	
審 査 委 員	主 査 准教授	木下 京子
	副 査 教 授	久保田 晃弘
	副 査 東京工業大学大学院教授	安田 幸一
	指導教員 教 授	小林 光男

内容の要旨

本論では「都市の肖像」を問うことを出発点としている。都市についてはあらゆる学問分野から語り尽くされているため、先行研究は多岐に渡る。それらと自らの作品表現を重ね合わせることで都市を予感させる表現の模索を行う。

論文構成は自作の制作スタイルを軸にした 4 章で成り立っている。前半の 2 章までが都市論を中心に、後半は自作について時系列順に説明していく。都市論と自作は以下の方法により連結している。まず分野を超えて広がっている都市論を、自作との関係性を考慮して選び出し、自作の周囲に再配置する。この際、制作スタイルを軸となっている「全体像」を作り出している「細部」を集積する手法を足がかりにした。細部の執拗な集積から全体像を探っていく表現手段は自作の基本構造であり、このスタイルは都市を考察する中で確立された。そこで本論の構成としても「細部」に当たる部分に都市論から抽出した要素を連結させて全体像を検証する方法を取る。したがって論文構成上、第 1 章で「全体像」を、第 2 章で「細部」についてそれぞれ言及しているが、これらは分離した概念ではない。第 1 章で大まかな全体像を捉えた後、それを構成している「細部」について言及している。さらに「全体」と「細部」の関係は、後に続く第 3 章、第 4 章で述べる自作の制作スタイルへと引き継がれる。この論文構成により都市論は自作を支える基盤となる。

以上の構成を軸にして、第 1 章からの内容を簡潔に述べていく。第 1 章では様々な都市論を中心に検証を進めていく。都市の全体像について考察するにあたり、まず多岐にわたる都市論に筆者が着目したものを選出し、自作との関係性を考慮しながら再配置する。書かれた内容や背景が異なる都市論を直接関係づけると生じる歪みを、「都市の肖像を求める」自作の目的を介在させることで間接的に繋いだ。これにより本論で構築された都市論から都市像を探る新しい方法を導き出すことを目的としている。さらに都市の全体像を捉える目的を「俯瞰」という視点を中心に考察する。都市の全体像をイメージすることから始め、本論で目指す「肖像」を明確にする。そして自作との関連を含めて「地図」について最後に言及する。地図としての歴史背景を含め、自作では明記されている記号に着目している。言葉や記号の一つ一つに焦点を合わせて行くことで次第に地図としての全体像がぼやけ始めた。ここまでの第 1 章となっている。

次に第 2 章では「細部」に着目する。本章が細部の集積が全体像となる自作の都市像へと結びつける要となる。ここからは筆者が「都市」という言葉から抱く印象の核となっている「東

京」を出発地点とした。本章でもいくつかの都市論を取り上げて行くが、いずれも都市という大きな全体に対して些細な部分の集合や連続に着目しているものである。その中でも建築家の篠原一男（1925 - 2006）の東京をモデルとした「超大数集合都市」は筆者が実感している都市の魅力と現状が語られている。これをヒントに本論では作品論への転換を試みる。都市の集合体としての成り立ちと美術作品について考察すると、河原温（1932 - 2014）の《Today》が想起された。本論では《Today》における一連の制作プロセスに注目し、創造と蓄積の連鎖を作品として定式化した例として取り上げる。最後に本章では個が増殖し肥大化する集合体としての都市像は、全てを飲み込み一体化しつつあるのではないかと予想する。

第3章からは細部の集積として成り立つ全体像が自作の制作方法となっていることを踏まえながら詳細な制作手順とともに説明して行く。作品表現は自らへの問題提起と検証の結果が立ち現れてくる。都市に対しての疑問は一つ作品を消化するとまた新たな疑問へと連鎖されていく。したがって本章からは時系列順に作品を説明していく。まず「都市」をテーマに作品を展開して行くきっかけとなった2013年の《Tokyo》から始まる。都市と時間の関係について考察した結果、鉄を溶接して積層させる表現へと行き着く。その後も積層の1膜を捉えようとする《Tokyo - skin no.1》《Tokyo - skin no.2》を制作した。

次に作品の大きな転換期を経て第4章へ移り変わる。地図に書かれた都市名を作品の構成要素として取り入れた自作《Cities & Names 1990》《Cities & Names 2012》が契機となっている。明確な意味を持つ都市名を集積させることで予期できない複雑性を得ることができた。その後続けて《内在する都市1》《内在する都市2》を経て、《地図より都市を望む》のシリーズへと進めていく。刻印が次第に密になることで、意味の集積による複雑性に都市らしさを見出した。

本論では既に確立されている都市論を見据えながら、そこに埋もれている細部を構築し都市像を求める。その方法として地図の解体と再構築という手法が確立された。作品展開は、都市の姿を探るために繰り返す、検証の連続である。変動する都市は常に、新たな展開が予想されてくるのだから、それを続く限り追うことが出来る対象である。だから常に都市の全体像はいったいどのようなものなのか問う必要があり、それに対応する手法をもつ必要がある。解体し再構築をするサイクルにより新たな肖像を探求していく。

審査結果の要旨

本論は金属という素材を選択し、「都市」をテーマとした作品制作に取り組む筆者の制作記録である。「なぜ都市に魅了されるのか」、そして「なぜ金属を用いて都市を表現しようとするのか」といった制作の根幹を成す問いに対する答えを導き出し、作品として結実させたそのプロセスを明示した論考である。

第1章では「都市の全貌」を把握すべく、その試みとして若林幹夫の『都市論を学ぶ12冊』で挙げられた12冊の都市論に依拠し、筆者は自身が抱く都市のイメージを明確化した。また多様な都市論を考察した上で、「俯瞰」と「地図」をキーワードとして抽出した。これらのキーワードが筆者の博士課程2年次後半以降の作品展開に大きな影響を及ぼしている。

第2章では、ジェイン・ジェイコブス、ケヴィン・リンチ、篠原一男、磯崎新らの著述や河原温の作品と研究ノートなどを参照しながら、東京を「細部の集積による都市」として定義した。さらに「細部の集積、あるいは増殖」が様々な質的变化をもたらすことを踏まえ、自作で求める都市のイメージを「都市のディテールとなる様々な人工物が密集し、それらは時間と共に増殖する。このディテールと時間により、都市はあらゆるものを飲み込み、巨大化していく。さらに、その渦中にある私たちは、至るところに存在している都市を行き来し、記憶の中で結びつけ拡張していく。それは結果的にさらに都市を拡大している」とし、そこから見える都市

像を「あらゆるディテールを飲み込んで、一体となりつつある姿」として捉えた。

第3章では大学院修士課程の修了制作《Tokyo》から博士課程2年次までの筆者自身の作品の流れを追いながら、都市についての理解の変化と作品制作における試行錯誤を具体的に述べている。筆者は「都市における時間の蓄積」を可視化しようと鉄の棒材を溶接し増殖させることで作品の密度を高め、一定の評価を得た。しかしながら、「作品に対して行う行為の量が視覚的な複雑さと単純さに比例する」ことに気づき、地図の上で棒材をさらに複雑に入り組ませ堆積させることで混沌とした都市像を表現しようとした。それが「実際に作品を構成している一本一本の鉄は、光を投下しない不透明な性質のものである。しかし、作品全体が光の一部を投下し、埋もれた最下層の地図を認識させることで、この作品は半透明な印象をもたらしている」と思うようになり、「蓄積が増すにつれて、下の地図がぼやけるかのように見えにくくなる視覚的な効果は、まさに積もり行く埃のようなものである。埃が『流れ行く時間の痕跡』であるとするならば、《Tokyo》は、その時間の痕跡である『埃』にあたる部分であるのかもしれない。するとまさにこの作品はそれ自体が半透明な時間のヴェールであり、鉄を用いた半透明な立体表現である」とする考えに至る。そこで「地図」を基底にしつつも、「埃」、「半透明」、「積層」のキーワードを念頭に置き、膠など筆者にとっては新たな素材を用いて制作に取り組んだ。けれども、「積層」を表現するために模索して辿り着いた新素材に対して疑念を抱き、「集積」という言葉に転化して素材を再び金属に戻すことにした。本章では作品のコンセプトと素材の選別、制作上の葛藤が真摯な言葉で綴られている。

第4章では都市について改めて考え直し、博士課程2年次の途中、制作が停滞していた時期に「都市」と「時間」をキーワードにしたドローイングを描き続けたことを言及し、ドローイングの意味とその意義について検証している。それが《Cities & Names 1990》《Cities & Names 2012》を生み出す契機となり、《内在する都市1》《内在する都市2》、そして《地図より都市を望む1》《地図より都市を望む2》の刻印を用いた一連のシリーズへと繋がった。このドローイングとは、地図の上にトレーシングペーパーを置き都市の名前だけを記したり、道だけを描き出したりといった内容で、一枚の地図から都市名の文字や記号、道路などの地図を構成する各種要素を分離させドローイングにおこす行為は、筆者にとって「地図の解体」を意味した。そして地図から分離させた都市名が刻印され続け集積されたことで、アルミの板の上に新たな形が創出されたのである。筆者は都市の名の集積による創り出された多様な形状を都市の再構築と捉え、新たな都市像を得る方法論とした。

筆者は「見えない都市を見たい」という欲求と「都市とは何か」という疑問に対するその答えを求め続けるという姿勢が都市を理解するための唯一の方法であるとし、それが筆者の求める都市の肖像であると結んでいる。

本論の主題である「都市」は、「都市論」の一つとして言及されるべき都市ではなく、アーティストの金子未弥が「都市とは何か」という自問に対する答えを希求した結果、見つけ出されたものである。金子は独自の視点と感覚で都市を考察し、それを作品制作に結び付けた。いや、作品を制作しながら答えを見つけていったとも言える。論文については、全体的に感覚的な表現が多く、恣意的な解釈も見受けられる。論として成立しない文意もあり、説明不足、あるいは金子が意図する内容が伝わりづらい文章も散見される。だからこそ、うまく文章には収まらない行間を漂う何か昇華して、金子芸術が生み出されているのかも知れない。

作り手が博士論文を執筆する場合、研究と制作のバランスを保つことは非常に難しい。美術大学の博士課程に身を置く作家志望の学生たちはそのジレンマに苦しむ。金子にも紆余曲折があったものの、博士論文を執筆することで制作の方向性が定まり、質の高い作品を生み出すことができた。だが、制作の方向性を見失った時に、金子は第1章でキーワードとして着目した「地図」に再び焦点を当て、地図を引用してのドローイング作業をひたすら続けた。それは自らが考える都市のイメージを具現化するブレンストーミングの効果をもたらしたように見受けられ、刻印の作品を生み

出す機縁となった。

本審査時にはいくつかの質問が投げかけられた。主査と副査の理解が及ばなかったことが、金子にとって「地図」の持つ意味であった。また、制作においても地図の利用法についてはいくつかの質問があがった。具体的には、地図のスケールや使用する地図の範囲などであった。またアルミ板という重量のある金属板に刻印することの意味、刻印することにより自然に生じる板の反りなど金属を使って「都市」を表現することの特性について、素材そのものについてもまだ語るべき点があるのではないかという意見もあった。さらには「解体された地図」を「再構築」することが「都市の肖像」を求めることになるのか、という根本的な疑問もあがった。具体的なイメージが作品に見えてくるものではなく、抽象的なイメージが沸き上がってくる表現のほうを求めている都市像に近いのではないかというアドバイスも寄せられた。

他にも様々な質疑応答がなされたが、つまるところ、日々変貌を遂げている都市を「肖像」として捉えて作品化するには、金子が論文で述べているように、常に都市の姿を追い求めながら手を動かすしか他に手段はないのだと思われる。金子はそれに対峙する鋭い感受性と思考力、形にするための探究心、そして作品として成立させる力を身につけたものと評価され、博士号を授与されるに相応しいと判断された。

(木下京子)